

# 研究結果報告書

## 研究結果

そもそも国の文字改革はその国一国だけのことで、他国とは何のかかわりはないはずである。しかし、明治期における文字改革論を検証してみると、「支那」という語が頻出しただけでなく、「支那」のこともよく説かれたことが分かる。これらの「支那」はまず漢字の生みの親、そして、漢字を使用する国として、明治期の文字改革論に結びついたのである。ところが、その頻出した「支那」は国名を表すだけでなく、当時の中国の実像をはっきりと示していた。つまり、「不便無益」な漢字を使うことによって、中国は西洋列強に侮蔑され、外国とまともに戦争できないほど、文明的に立ち遅れた中国像である。この中国像が明治前期の知識層にとって、書籍や中国と外国との戦争状況から得た非体験的なものだとなれば、日清戦争による中国像は、いうまでもなく、非常にはっきりした、確かなものになる。

日清戦争によって、日本人はかつて文明的に大きく日本を引き離した中国が逆に日本に劣ったという、中国の衰弱のひどさが手に取って分かることになった。それだけでなく、日本の勝ちにより、日本人が中国に対する態度も一変し、井上哲次郎の言うように、中国は日本にかつて尊敬された国から完全に見下げられた、もう日本がその悪影響を一日も早く脱却し、その文明から遠ざけようとする惨めな国になってしまった。従って、このみすばらしい国から伝わった、漢字を始めとするあらゆる文物はもう何の価値も魅力もなく、一刻も猶予せず、早く排除されなければならないことになったのである。つまり、日本の勝利を皮切りに、日本は完全に中国を蔑視するようになった。また、この勝利は漢字を日本から駆除しようとした明治期の文字改革論者にとっては、もってこいの有力な口実になった。

要するに、この、文字改革論に出ている「支那」は終始「否定的他者」として、非文明的な文字を使うから、西洋に劣ってしまったということを反面教材として日本に見せ続けたのである。

## 研究成果の公表について(予定も含む)

### 口頭発表 (題名・発表者名・会議名・日時・場所等)

題名：明治期の文字改革論における他者

発表者：陳月娥

2011年9月11日、南開大学日本研究院と中華日本哲学会主催会議「グローバル化における中東亞文化の価値」、場所：天津華城ホテル5階

### 論文 (題名・発表者名・論文掲載誌・掲載時期等)

発表予定：

「漢字論における他者の意味」 明治期の文字改革論を中心に

『哲学動態』、2012年

### 書籍 (題名・著者名・出版社・発行時期等)